

十島村教育委員会だより 令和2年11月号

さわやかトカラ情報

南北160km

「心をつなぎ 気概に満ちた」十島の教育

十島村教育委員会
〒892-0822
鹿児島市泉町13番13号
TEL 099-227-9771



実りの秋に感謝

十島村教育長 有村 孝一

実りの秋といいますが、私はこの季節が教員時代大好きでした。夏休み終了後から、あちこちの作品募集に挑戦していましたが、その結果が少しずつ表れてくるからです。あんなに待ち遠しくてワクワクしたことはありません。

コロナ禍の中で、本村の児童・生徒は2学期に入り運動会や文化祭・学習発表会等の行事で、一生懸命活動して自分を高めてきています。それは、11月1日(日)から7日(土)の「地域が育む『かごしまの教育』県民週間」での様子からも垣間見ることができたのではないのでしょうか。

国語や算数・数学の教科だけでなく、道徳や学級活動や給食フェスタ等で日常の子どもの様子を見ていただったり、秋の収穫祭や黒糖ピナツ作り等の行事で工夫を凝らしたりする各々学校の様子をお楽しみいただけかと思えます。マスク着用や人数や場所等のソーシャルディスタンス制限をお願いして、島民の皆様にも御理解をいただきながら、行事を行ってきました。その中で、児童・生徒は、先生方の指導のもと、多くの成果をあげています。

成果の一つとして、11月21日(土)に、学校新聞コンクールの授賞式がありました。中学校の部最優秀賞1席に口之島中学校、2席に宝島中学校、佳作に平島中学校、小宝島中学校と入賞をいたしました。また、学校賞といえば、県「家庭の日」絵画ポスターコンクールと中学生「税についての作文」で、宝島中学校が2つの学校賞を受賞しています。

諏訪之瀬島小・中学校も、前述した「県民週間」ポスターで学校賞をいただいています。諏訪之瀬島小・中学校は、絵画等のコンクールにおいて、村の小・中学生入賞者のほぼ半数を占めています。

悪石島小・中学校は、鹿児島県「体力アップチャレンジかごしま」で、4年連続特別賞をいただいています。

小宝島小・中学校と口之島小・中学校は、村作文審査で推薦と特選の多くの受賞者がいます。平島中学校は、毛筆や絵画で全国の書画展の金賞や県理科作品展で入賞者を出しています。

中之島小・中学校では、短歌や絵手紙コンクールでの入賞ばかりでなく、算数・数学検定の合格者を5名出しています。他の学校も、英語検定や漢字検定で合格者を出しています。

小宝島小・中学校や宝島小・中学校では、テレビやラジオで作品が放送されています。

十島村全体を見ても、一人2枚以上は、賞状をもらったことになり、賞状だけが、成長の成果だとは言えませんが、成長の証となっていることは確かです。

コロナウィルス感染症に負けないで、懸命に頑張っている子どもたちを、どうか褒めてあげてください。激励してあげてください。やがては、村を支える立派な大人に成長してもらわなくてはなりません。村民の皆様温かい声援をお願いいたします。

中学生の「税についての作文」
最優秀賞 宝島中学校1年 今里 陽巳

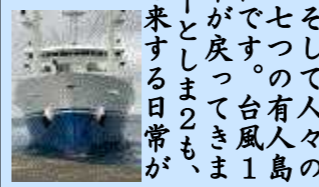
「下り便では、乗船人数を120名に制限し、完全予約制といたします。」防災無線のアナウンスが流れ、フェリーに乗船制限をかけることが知らされた。「さすがにコロナが広がっていると、これくらいはして当然かな。」放送を聞いた僕はそう思った。種子島、屋久島から奄美大島の間に点々と並ぶトカラ列島の島の一つ、宝島。僕は、そこに住んでいる。今、新型コロナウイルスの感染が拡大する日本。十島村全体で抱える問題は医療体制の弱さである。コロナ患者が一人でも出ると、ライフラインとも呼べるフェリーも止まり、奄美などからのヘリコプターで患者搬送となるため、多額の税金をそこで消費することとなる。国はすでに全国民にマスクを2枚ずつ配布し、コロナ対策について呼びかけている。しかし十島村では、鹿児島県本土のようにマスクが大量に買えるというわけではない。そこで村が打ち出した政策が、全世帯へのマスク配布だった。マスクの配布には、税金が使われる。また、医療費の負担軽減、国の10万円寄付にも、税金は使われた。では仮に、税金を使わなかった場合はどうなるのか。コロナに感染しても、医療費の高さから病院にも行けず、そのまま重症化し、さらに莫大な医療費を請求されることとなる。そして感染が拡大すれば、医療体制が弱い十島村では、間違いなく村存続の危機におちいってしまう。それを見越せば、感染が拡大しないうちに対策を強化し、その政策を成り立たせるために日々私たちが払っている税金を投入する。自分が出したお金を、少しでも自分たちの命を守るような形で使用する。まさに税金が「命綱」となっているのだ。「命綱」として使われているのはそれだけではない。僕は、租税教室での学習を思い出した。一生のうちに収める税は、国税、地方税を合わせて約20種類もの税がある。税務署の方によると、2019年10月1日から消費税が8パーセントから10パーセントに上げられ、上昇分はすべて社会保障に充てられる。社会保障の政策の一つは年金だ。年をとって働きづらい高齢者の方たち。そんな方たちにとって年金は自分の生活を維持するための「命綱」なのだ。私たちの身の回りにある税金。この緊急時代の中、税金はコロナウィルスという敵に打ち勝つために使われている。ただ単に新しい生活様式を適用したり、マスクをつけて対策するだけでなく、納税の義務を果たすことが「命綱」を守ることにつながるのだ。本来の安心・安全は、納税者である私たち一人一人にかかっている。

次回は、特別賞税務署長賞の作品を掲載いたします。

【シリーズ】新聞に投稿

(令和2年9月12日南日本新聞「若い目」掲載)
宝島小学校5年 松下 朔也

「台風10号はとてつもない勢力が強いから、エリーとしまは四国へ避難しないから、けなない。ぼくの父は、フェリーとしまは2で働いていて、台風や悪天候の時、欠航になることは知って避けたけれど、エリーとしまは別の場所へ避難しなくていいよ。今の台風は大きいのだから、改めるといけな。父はフェリーに乗って四国に向かいました。このまま鹿児島に碇泊して、民に大変な影響が出ると、今後の十島村の交通手段となり、鹿児島と七つの有人島のつないでいる大切な存在です。台風10号が去り、宝島にも日常が戻ってきました。また鹿児島と十島村を行き来する日常が戻ってきました。父もいづもの仕事に戻りました。宝島での毎日も安心して過ごせます。



(令和2年10月13日 南日本新聞「若い目」掲載)
中之島中学校1年 田中流颯

ぼくが中之島の中で好きな場所は学校です。特に児童・生徒数が合わせて1人と少ないので、小学1年生から最上級生の中学2年生まで仲が良いところがとても気に入っています。例えば、昼休みになるとみんなでサッカーや野球、バレーボールなどをして、毎日楽しく過ごしています。生徒会の仕事をすると、全員の人数が少ないので、ひとりひとりが力を合わせてがんばるようになります。文化祭や運動会のような大きな行事をするときも、普段から協力することがみんなの身についているのを生かして、それぞれが助け合っているのを感じています。ぼくはこれからの学校生活を送るために、みんなと仲良くしていききたいと思っています。



台風10号とフェリー

ぼくが好きな場所

税を考える週間

【標語の部】

鹿児島小売酒販組合 理事長賞
小宝島小5年 米山 侑希
税金で 支えていくよ
国と町の骨組みを

青の俳句入賞作品

口之島小6年 林 優希
分らない
ゴーヤがうまいと 言う大人

宝島小6年 舟木 蒼哉
森の中
夏の生命 みちている

シリーズ・・・十島村で学ぶ

【宝島で学ぶ】「宝島に来て新しい自分との出会い」
宝島小学校5年 舟木 蒼哉

私は、宝島に来て2年目になります。たくさんのがんばったことやうれしかったことがあります。今の自分は、宝島に最初来た時、私は、自分のことを周りの人や友だちに全く話せませんでした。特に、初めの1学期は、「宝島に来た意味があるのだろうか。」と思うこともありましたが、しかし、時間が経ち、だんだんと家でも学校でも、学級の友だちや中学生としゃべることができるようになりました。心を開ける友だちもできて、勉強や遊びが以前よりも楽しくなってきました。私が「変わった」と思ったのは、いつも生活を支えてくださっている里親さん、離れていても話を聞いてくれる母の存在があったからです。また、学校の先生や地域の方々もいつも私を見守ってくださいました。バドミントン部では、「勝つこと」だけではなく「みんな楽しむ」ことに気付くことができました。

環境が変わると、学習がよく分かるようになり、成績もぐんと上がりました。とてもうれしかったです。その時に「宝島に来てよかった。」と心から思いました。5年生になり、高学年になりました。更に「新しい自分」になれるように、学習も生活も精一杯がんばっています。今、私は「夢」を持つことができている。

「新しい自分」が「夢」に向かって一步一步進めるように、宝島での生活を毎日大切に過ごしていきたいです。

【平島小・中学校からのメッセージ】
教諭 奥蘭 淑子

大学2年の正月、「二十歳になったから、もういいよ」と言っていた私に父は「まだ就職もしていない、大学に通わせてもらっているんだから子どもだ」と言って、お年玉をくれた。就職しても、結婚しても、母親になっても、ずっとずっと子どもだと言ってお年玉をくれた。昨秋、他界した父は死ぬまでずっと私を子ども扱いした。

さんふらわあに乗って父の郷里にUターンしたのは幼年期。それから11年間を過ごした町は、この平島とよく似ている。自宅の前は集落のみんなで作ったらしい砂利とセメントの道路だ。小学生の時は、夏休みの早朝に公民館でラジオ体操をしたあと、順番に集落放送で朝読みをした。長く留守にするとき以外には家に鍵をかけることもなく、集落内の人で知らない人はいなかった。校区の行事や集落清掃の連絡が集落放送であることや小学校の校区には信号機がないのは今も変わらない。

我が子も中学生になり、生意気な口を利くようになった。返事をしなかったり、朝もいつ出て行ったのかわからない日があったりする。しかし、助けられ、地域の中で育てられている実感がここにはある。平島で、息子たちが少年期を過ごせることにとても感謝している。今夏、母一人になった家に一ヶ月間世話になった。父の思い出を語り、少しだけ泣いた。

『教職員仲間であるあなた』への 私からのメッセージ

昨年度の村教研で各島の先生方と、初めてお会いした時に「十島はひとつ」を実感しました。今年度は新しい生活様式の中で、今まで通りの実施ができなかったことが残念ですが、みなさんと心をつないで頑張りたいと思っています。よろしくお祈りいたします。